

## 『沈黙 サイレンス』

2017年02月21日

マーティン・スコセッシ監督の『沈黙 サイレンス』を観る前に、遠藤周作の原作『沈黙』を読み返した。映画は小説を忠実に再現していた。映画は事柄を絵画的に捉えることができる。小説は心理描写が深められるので、人間像を立体的に想像することができる。

キリシタン禁制の下、激しい迫害がありながら、カトリックの司祭たちの日本宣教に対する熱意には敬服する。プロテスタントが起こり、カトリックは新しい宣教地を求めている。日本は有力な宣教地になり、大きな成果を上げていた。戦国時代、戦乱で人の命は容易く奪われ、この世の生活は苦役に満ちていた。司祭の説くデウス（神）を信じれば、苦しみのないパラソ（天国）に行けるとする信仰は庶民に受け入れられた。戦国大名は交易によって莫大な利益を得、キリスト教文化は魅力的であった。40万人ものキリシタンが生まれた。当時の人口は1,200~1,300万人と言われているから、キリシタン比は3%で、現在のクリスチャン比の3倍にもなる。しかし、豊臣秀吉、徳川家康の時代になると、キリシタンがヨーロッパ諸国と結び、大きな政治勢力になり、植民地化されることを恐れ、キリシタン禁制政策を取り、迫害が始まった。『沈黙』は、その迫害時代、尊敬する恩師フェレイラ師が転んで棄教したと伝えられ、彼の消息を掴もうと日本に向かった司祭たちを描いている。カトリックでは、棄教すれば、全ての名誉が剥奪される。主人公のロドリゴ師たちは、キリシタンのキチジローと共に日本に辿り着き、彼の案内で司祭のいなくなったキリシタン村にかくまわれ、宣教活動をする。キリシタンたちはミサと「告悔（罪の赦し）」を喜ぶ。しかし、探索は厳しく、キリシタンは疑われ、棄教を促す「踏み絵」から始まる過酷な拷問にかけられる。映像で、地獄谷での熱湯かけ、斬首、火刑、海岸での水磔、逆さ穴吊など、残酷に描き出している。一度訪ねた村が、村ごと、殉教し、廃村になっている。キチジローは再三、踏み絵を踏んで転ぶが、その度に司祭の所に来て、泣いて「告悔」を求める。彼は強い信仰を貫けない弱い自分を嘆く。遠藤周作は「主はなんのために、これらみじめな百姓たちに、この日本人たちに迫害や拷問という試練をお与えになるのか。いいえ、キチジローが言いたいのはもっと別の怖いことだったのです。それは神の沈黙ということ」と書いている。人間の苦悩を放置する神の沈黙が小説のテーマである。そして、ついにキチジローは、銀300枚の懸賞がつけられたロドリゴ師を役人に売る。銀300枚は、現在では150万円に当たり、高額で、禁制の激しさを表している。ロドリゴ師は老練な井上筑後守によって優遇されながら、拷問を見せられ、棄教を迫られる。一緒に来日したガルペ師が、簀巻きにされて海中に投げ込まれたキリシタンを助けようとして溺死する姿も見る。また、消息を求めていた、棄教したフェレイラ師に直面する。彼はロドリゴ師に「この国は沼地だ。やがてお前もわかるだろうな。この国は考えていたよりも、もっと怖い沼地だ。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」と諭す。超越する神を受け入れない日本文化を語っている。ロドリゴ師は夜中、鼾に聞こえた声が、逆さ穴吊され、拷問に苦しむ呻きであると知らされ、慈悲の心があるならば、踏み絵を踏み、そうすれば、彼らを助けると言われる。その時、踏み絵から「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたつため十字架を背負ったのだ」という声を聞く。彼は踏み絵に足をかける。遠藤周作は、『沈黙』でキリスト教を受け入れる日本文化を問いかけ、転びの痛みを包み込む十字架の主イエスを、彼の福音理解として著している。